

岡山大学

埋蔵文化財調査研究センター報

第 11 号

1994年 3月 発行

岡山大学  
埋蔵文化財調査研究センター

〒700  
岡山市津島中3丁目1番1号  
TEL・FAX (086)251-7290



## 海の恵みと古代人

縄文時代の始め、約1万年前ごろから海に近い集落ではさかんに貝を採取するようになった。貝塚では、貝のカルシウム分のおかげで、食料となった鹿・猪、外海岩場や内湾砂泥にすむ魚の骨、それに骨角牙製の釣針や銛といった漁具が良好な保存状態でのこることが多い。海辺の自然と生活の豊かさを物語ってあまりある。稲作中心の弥生時代以降になると、こんどは多量の製塩土器やタコ壺などを出土する遺跡が現れる。もっとも土器による塩作りは、貝や魚を採るようにどこでも行われたわけではない。限られた地域で発達し、なかでも備讃瀬戸は有数の土器製塩地帯であった。海辺の集団が作った塩は、米作りに精出す人びとにとって貴重品であったにちがいない。海岸線から相当離れた遺跡から1つ、2つと少数の製塩土器が発見されることがあり、塩運搬の軌跡を示すとも考えられる。じつは縄文人も、海産の貝や魚の骨・歯を内陸へ持ち込んだ。ただし、これは主に腕輪やペンダントといった装飾品用であった。ともあれ海の幸は、山の幸・田の恵みとも交わっていっそう輝きを増したらしい。

(センター長・稲田孝司)

# さかなをとる。



## 魚

私たち日本人の大切な蛋白源・魚。魚をとるには一本釣り、ヤス、網など、いろいろな方法があるが、波静かで小魚の多い瀬戸内では、網の利用が盛んだったようだ。海辺の遺跡から、石や土で作った網のおもり(土錘・石錘、右写真)がよく出てくることから、それがわかる。石のおもりにはわずかな凹みをつけ、土のおもりは焼く前に穴をあけている。網につけるための細工だ。岡大構内では、かつて海に面していた鹿田地区の遺跡から多く出土し、最も古いものは弥生時代にさかのぼる。



## たこ 蛸

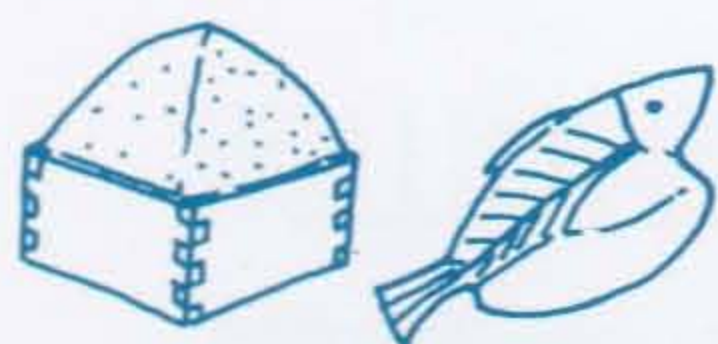
タコも、日本人が好む海の幸の一つだ。いまでも瀬戸内海はタコ漁が盛んだが、ルーツは古く弥生時代にまでさかのぼる。道具はタコつぼで、岡山地方では奈良時代以降の遺跡から多く見つかる。

左に写っているのは、鹿田地区の平安時代の集落から出土したタコつぼだ。穴に縄をくくりつけ、何十個もまとめて海中にしかけたものと思われる。その形や大きさから考えて、獲物はおもにイイダコだったらしい。マダコなど大型のタコをとるためのタコつぼは、さらに新しい時代になってから本格的に現れるようだ。

## 貝

遠浅の浜や磯さえあれば、いちばんたやすく手に入るのが貝だ。海へ乗り出して魚やタコをとるのが男性の仕事なら、浜辺で貝を集めるのは女性や子供の大切な仕事だったろう。母子連れで潮干狩りをする姿が、遠い昔から瀬戸内のあちこちで見られたはずだ。右の写真は、鹿田遺跡から出土した貝殻。ハイガイ、シジミ、カキ、ウミニナなどが中心だ。いずれも泥の多い河口や浅海にすむ貝で、当時の鹿田集落が面していた海岸のようすが想像できる。





# 塩をつくる

塩分が健康の大敵であるかのように言われる今日この頃だが、人が生命を保つうえで、塩は絶対に欠かせない。食物の調理や保存のためにも、塩は必要だ。

現在のような化学的な製塩技術がなかった時代、塩は、濃くした海水を煮つめてとっていた。晴れの日が多く暖かで波静かな瀬戸内は、このような塩作りにはうってつけの土地で、とりわけ備讃瀬戸の沿岸は、およそ2千年前の弥生時代から戦後にいたるまで、日本有数の塩業地帯であり続けた。

この地域の海沿いの遺跡からは、海水を煮つめるのに使った土器（製塩土器）がたくさん見つかる。濃くした海水（かん水）を入れた土器を火の中に並べ、かん水をつぎ足しながら何時間も焚きつめると、土器の中に真っ白な塩がふいてくる（右上写真）。

塩ができる頃、何時間も熱を受けた土器は、表面がぼろぼろに剥がれ、やがてこわれてしまう。一回きりの使い捨てだから、製塩土器のつくりは粗末であらう。大学構内の鹿田遺跡でも、こわれて捨てられた製塩土器のかけらがまとまって出土した（右写真）。

海水のくみ上げ、かん水を煮つめる作業、そのための土器作りや燃料の切り出しなど、塩作りの仕事はたいへんな重労働だったにちがいない。真夏の炎天下など、塩は土器の中だけでなく、作る人々の灼けた肌の上にもふき出したくらいではなかろうか。こうして得られた貴重な塩は、必需品として山間の地方にもゆきわたり、先祖の暮らしを支えてきたのである。



塩を作る実験 濃くした海水（かん水）を根気よく煮つめていく。熱気とのたたかいだ。かん水をどのようにして作っていたかはまだはっきりわかっていない。



捨てられた製塩土器 鹿田遺跡（附属病院外来棟建設地）で見つかった。時期は古墳時代初め頃（約1700年前）

（助手：松木武彦）

## 出土したもの、見てみませんか

構内の発掘調査で出土したものを、間近に見てみませんか。当センターでは、縄文時代から明治時代まで、形がよくわかるもの、時代を代表するものを厳選して展示しています。いつでもお気軽にお越し下さい。また、本部事務局の第1会議室にもミニ展示コーナーを設けています（写真）。展示の入れ替えも随時おこない、内容はいつもフレッシュ。会議室ご利用の際はぜひご覧ください。

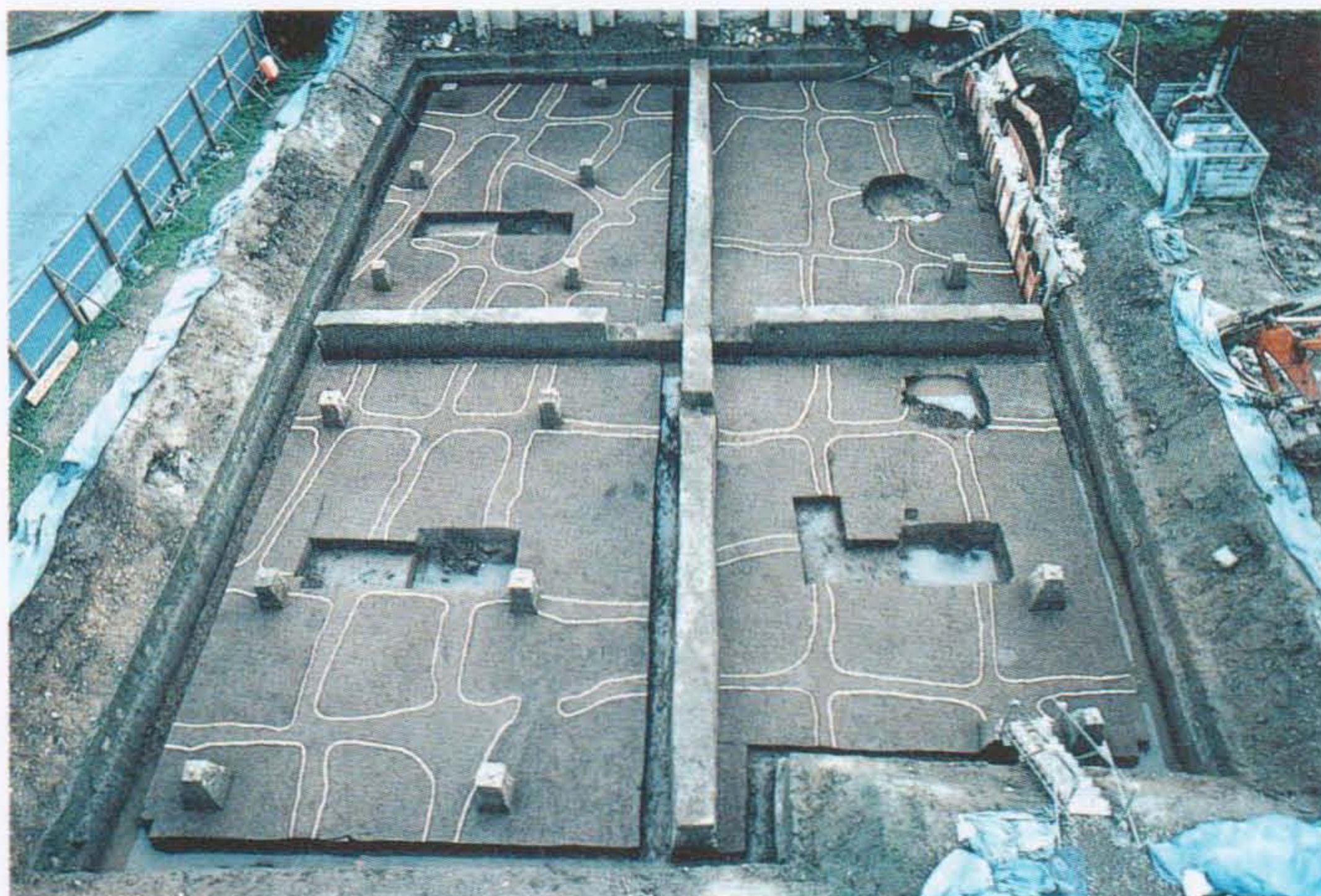


## ◆◆◆ 最近の発掘調査から ◆◆◆

# 弥生時代の水田を掘る

— 洪水に埋もれた田園風景 —

津島岡大遺跡第11次調査(情報処理センター予定地)



弥生時代後期の水田(左:完掘状態, 右:調査状況)  
洪水の砂の層を丁寧に掘り下げるとわずかな土の高まりが帯のように現れる。微妙な土の色の違いや、凹凸の記録から当時の田園風景が浮かぶ。

津島キャンパスで情報処理センター新営に伴う発掘調査が、昨年9月より本年1月までのあいだ行われた。今回は津島地区で11回目の調査となった。

深さ約2.5mにおよぶ発掘調査の結果、この地点が弥生時代以来、連綿と水田が営まれていたことが明らかにされた。

調査は明治時代の造成土を取り除いた部分から慎重に地層を観察しながら進められ、最終調査面までに12枚の時期の異なる層が堆積していることがわかった。このなかで、とくに10層と11層とした2枚の層の上面には弥生時代後期の水田が比較的良好な遺存状態を保って発見された(写真)。

発見された弥生時代の水田の広さは、近代化された農法の水田を連想する私たちの想像とは異なり、

小さいもので1m×2m、大きなものでも3m×5m程度の長方形を基本とした形のものである。こうした弥生水田は洪水砂の層を丁寧に掘り下げると、調査区の一面に、さながらモザイク絵のように現れた。

地層のゆるやかな傾斜から、この地点は南東部が自然の高まりをもっていることがわかった。水田の区画は高まりの周囲でかたちが歪むものが多い(写真左上)。水平な地面に水を流すのとは異なり、段々畑のように水平な面を畦で区画してそれぞれの水田に均等に水が回るように工夫したのであろう。そうした苦労も、また洪水による砂の堆積により埋もれた。水田が良く残っている遺跡は当時の人々にとっては辛く切なく、考古学者にとっては、恰好の研究対象として、このうえなく嬉しい遺跡なのである。

(助手 阿部芳郎)

## NEWS

### 津島第12次調査はじまる

図書館の増築工事に先立ち、発掘調査がはじまりました。場所はいまの図書館本館の北側です。平安～鎌倉時代の水路や、弥生時代の水田など、いろいろなものが出ると予測されます。一度のぞいてみてください。

表紙写真の説明 備讃瀬戸の風光と海の生産用具。奥側左からタコ壺、石のおもり、製塩土器(複製)、手前が土製のおもり。

編集後記 今回は海の特集。私たちと海との深いつながりが、どんなに遠い昔にさかのぼるものなのか、おわかりいただけたでしょうか。高度成長の代償にたくさんの自然の浜辺を失った今、潮風の香りがますますなつかしく感じられます。(M)